

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

令和二年二月八日(土曜日) 午後二時三十分開演

演目解説 佐々木香織(石川工業高等専門学校准教授)

狂言 梶山伏(ふくろやまぶし)

梶の憑依がどんなに恐ろしいか、山伏の効験がどの程度のものかを、室町時代の庶民はこの狂言のように考えていました。筋はすこぶる単純、弟の太郎に憑いた梶がその息を通じて、見守る兄や祈禱する山伏まで冒すというものです。太郎は友達と山で梶の巣を下ろし、その時梶に憑かれたと見られます。太郎が梶に憑かれたしぐさと鳴き声が傑作です。能(葵上)の横川の小聖を気取る山伏の尊大さと胡散臭さも例のとおりです。頭脈を取り、鳥の印を結んでも、効果がないどころか、山伏自身や兄までが感染します。いったいだれが三人の邪気を除くのでしょうか。

能 阿漕(あじぎ)

禁断の海での密漁が露見して水底に沈められた漁夫の物語です。伊勢の国にあるその海を、漁夫の名をとって阿漕が浦といえます。初秋の一日、九州日向の国を出た僧(ワキ・ワキツレ)が伊勢神宮参詣の途中、この浦に通りがかります。そこへ釣り竿をかたげた漁翁(前シテ)が現れ、殺生を生業とする悲しみを述べます。僧も漁翁と共に和歌に明るく、歌学の知識を確かめたあと、漁翁は僧の求めに応じて地名のいわれを語ります。この浦が禁漁となったのは、伊勢神宮の神饌に供するためです。その掟を破った阿漕という漁夫は刑死し、地獄でも殺生の罪を責められます。そう告白する漁翁は僧に回向を頼み、悲痛な叫び声を残して漁り火のように消え失せます(中入)。読経する僧の前に再び現れた阿漕(後シテ)は執心の網を持ち、漁るわざの虜となつて罪を重ねる様子です。そのうちに波は猛火、獲物は悪魚毒蛇と変じて、息つく隙ない冥途の責めが展開します。救済はならず、罪科を助けてと叫ぶ亡者の声が丑三つの闇に響きます。

(西村 聡)

前シテ(漁翁) 尉髪をつけ、三光尉又は朝倉尉、或は笑尉の面をかける。無地熨斗目を着附に着、上に水衣を着て、腰帯をしめる。(持物、釣竿)
後シテ(阿漕) 黒頭をつけ、瘦男又は河津の面をかける。無地熨斗目を着附に着、上に水衣を着て、腰帯をしめ、腰蓑をつける。(持物、扇、網)

(午後四時三十五分頃終了予定)